静岡県　静岡市立清水小島小学校　　1～6年生　184名

竹内　明仁　先生

テーマ　【みんなで育てる「たてわりトマト」大作戦】

■　活動のきっかけ:

本校は、ほぼ１学年１クラスの小規模校であり、全校で構成するたてわり班活動は異学年交流の重要な場である。これまでは遊びが中心で活動が固定化する傾向にあった。
栽培活動は、子ども自身が収穫までの見通しが持て、自らの判断で活動しやすい。そこで、1～6 年生が同じトマトを育てることで、たてわり班活動の活性化を図ろうと考えた。

■　活動のねらい:

○　たてわり班活動に栽培活動を取り入れることで、異学年交流を活性化する。
○　（栽培途中より６年生にて）子どもたちの課題認識から問題解決へと追求し、販売を見通した商品設計を行なうとともに、地域活動へ参加し情報発信を行なう。

■　活動の流れ:

①　たてわり班で苗を植え、名札をつける（4 月 25 日　1 時間）

10～12 名ずつの全 16 グループでたてわり班を作り、プランター1 つに 2 本ずつ苗を植えた。また、グループ全員で苗 1 本ずつに願いを込めて名前をつけ、名札を作った。

②　班ごとの活動から全校活動へ

当初、トマトの世話はたてわり班ごとに当番制で実施することになっていたが、自主的に毎日水やりをしたり、他の班の水やりをする児童が出てきた。また、全校共通の活動であったため、委員会活動や学年で、追肥や支柱立て、害虫駆除などの世話をする機会が増えていった。

③　交流を活性化させた観察カード

トマトの生長過程は、学年ごとに交代で観察カードに記録していくことにした。
観察カードを全児童の目に触れる場所に掲示したことで、全児童が自分の班のトマトの様子を上級生や下級生の観察カードから知ることができた。また、低学年の観察カードに高学年がコメントを書くこともあり、たてわり活動の時間外でも日ごろから異学年交流が活性化した。

④　収穫。そして、ＰＴＡ納涼祭への出店へ

収穫期を迎えたが、バラバラに熟していくトマト。たてわり班で全員一緒にトマトを味わうことは難しいと感じた６年生から「班ごとでなく、収穫したトマトを全部合わせて調理したほうがいいんじゃやないか？」「ぼくたちだけでなく、たくさんの方に食べて欲しい」との意見が出てきた。話し合いの結果、7 月に行われるＰＴＡ主催の納涼祭へ出店し、オリジナルメニューを販売することになった。

⑤　オリジナル商品の開発

販売するのはトマトジュースとトマトケチャップ付オムレツ。ケチャップ作りは、スパイスが揃わなかったり煮込み時間がかかったり、できたてと冷めた後で味が違ったりと、３度も試作を繰り返した。また、資材や購入者、環境へのやさしさも考慮した上で、オリジナル商品を完成させた。

⑥　オリジナル商品の販売（7 月 18 日）

納涼祭に児童が出店するのは初めてのことだったが、保護者の協力を得て、オムレツ 60 食とトマトジュース約６リットル分を調理し、声を張り上げて販売した。子どもたちが自ら育て、収穫し、調理したトマト料理は大盛況で、わずか１時間で完売した。

■　活動を通して得られた成果：

○　たてわり活動に「栽培」という新たな活動分野を開拓することができた。
○　異学年同士での世話や観察カードによって、たてわり活動以外の時間も交流が活性化した。
○　トマトの世話を自主的に行う子どもが増え、子どもたちの命を大切にする意識が芽生えた。
○　６年生は、自ら育てたトマトを「商品」にするという活動を通して、自ら深く考え、多くの地域の方や保護者と深く関わることができた。
○　保護者や地域の方から理解ある声が多く寄せられ、学校から地域へ子どもたちの活動のようすを発信する機会となった。

■　モグモからのメッセージ：

たてわり班での栽培活動が、とっても楽しい交流の場に発展しているね。下級生の観察カードにコメントをした上級生の行動には拍手！
先頭に立って取り組んだ６年生は、下級生が「次はボクたちも！」と憧れるような良いお手本になったんじゃないかな。商品を完売した時の充実感や、地域の中で元気いっぱい育つみんなの様子が伝わってきたよ。